

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 梅村 尚樹

本論文は、宋王朝の時代(960-1279)における学校、とくに地方の官学の果たした役割について考察したものである。その際に、教育史の観点ではなく、むしろ地域社会における機能に注目して論じた点に特色がある。

まず序章において充実した学説整理を行ったあと、第1章では、北宋の前半期における孔子廟と官学の関連について分析した。政策としては、地方に孔子廟が設置され、次第にそれが学校に転換させられていく動向が見られる。それは、学校と孔子廟を一体とした「学宮」という観念が登場していたことと密接に関連している。

第2章は、地方官学の振興に努力した人物の顕彰に着目する。四川の成都府学は、古く漢代の文翁という人物が開設したものであるということが、宋代に入ることさらに称揚されるようになった。このような文翁にまつわる言説は、成都府学の有する素晴らしい伝統を喧伝しようとする意図を示している。これに対抗するように、福建では唐代の常袞が教育振興に努めたという話が語られるようになった。このようにして、地方官学は、ますます地域に根差した存在と見なされるようになっていった。

第3章は、地方官が着任したときに廟に拝謁する儀礼を取りあげた。北宋の後半期から南宋初期にかけて孔子廟が特に重んじられるようになり、その結果、地方官は着任時に学校に赴いて実態を視察することになったのである。他方で、南宋中期以降、各地域固有の拝謁対象も増えていった。

第4章は、先賢祭祀について論じた。先賢とは、各地域に関係する優れた事績ゆえに祀られる過去の人物のことである。学校のなかに先賢を祀ることの意義について、宋代における経学的議論を追うことで、その正当化の論理を明らかにした。

つづく第5章では、地域における先賢祭祀が、その先賢の子孫による祭祀と重なり合ったときに最も望ましいという考え方について、とくに魏了翁という人物による理論化に即して解明した。

本論文は、宋代の地方官学が地域社会において果たすようになった役割について、儀礼や祭祀の場という視点を強調しながら詳細に論じた力作と評価できる。とくに、当時の士人たちが、その儀礼や祭祀をどのように正当化していったのかという点について、経学的な議論を丁寧に追っている。より長い時間軸のなかにおける地域社会の歴史的展開やその実像など、なお解明をまつ点も残されているとはいえ、本論文で達成された成果の大きさに基づいて、審査委員会は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと判断する。